

# 第34期第3回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



令和2年3月26日（木）京都市アスニーで、第34期京都市社会教育委員会議の第3回会議が開催されました。「これから求められる生涯学習（次期基本計画案）」についての議論がされました。会議の模様をマナビィがレポートします！

## ■ 出席委員（17名のうち10名） ※五十音順

石川 一郎 委員，大澤 彰久 委員，櫻井 寿美 委員，園部 晋吾 委員，  
田村 穂絵 委員，豊田まゆみ 委員，廣岡 和晃 委員，本郷 真紹 委員，  
桎木 良子 委員，吉川左紀子 委員

## 第34期第3回社会教育委員会議次第

### 1 報告

- (1) 京（みやこ）まナビィニュースレターについて
- (2) 令和2年度「教育予算の概要」について
- (3) 令和2年度「学校教育の重点」について

### 2 主催事業及び刊行物の案内

### 3 議事

- (1) これから求められる生涯学習（次期基本計画案）について
- (2) 令和2年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」について

## ■ 挨拶（在田教育長）

## ■ 開会（吉川議長）

今回は大変な時期にお集まりいただき、ありがとうございます。  
次第に従いまして会議を進めてまいります。今回は、報告内容が議  
事のテーマに係る部分がございますので、報告から先に始めたい  
と思います。



## ■ 報告-1 京（みやこ）まナビィニュースレターについて

### ○ [配布資料 京（みやこ）まナビィニュースレターについて](#)

### ○ 事務局から

- ・京（みやこ）まナビィニュースレターでは市民の皆様の学びのきっかけとして京都市の生涯学習情報をお届けしている。
- ・今回のコラムは佐竹委員に「オリンピックの思い出」と題して執筆いただいた。
- ・選手時代の思い出や日本文化について学ぼうと思ったきっかけについてお書きいただいている。

当日、御欠席だった執筆者の佐竹委員からメッセージをいただきました。



- 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐織代表取締役，アテネオリンピックセーリング競技日本代表）  
この度は出張のため、第3回会議に出席できずに申し訳ございません。ニュースレターの投稿をさせていただき、ありがとうございました。  
仕事の関係者から「読ませてもらったよ！」などと声をかけていただき、改めて自分のやってきたこと、そこから得た学びを皆様と共有できた機会となりました。
- 事務局から
  - ・また、車いすフェンシングについての紹介の記事も掲載している。
  - ・この記事は担当者が実際に車いすフェンシングを体験したり、選手の方へのインタビューから作成した。実際に体験して車いすフェンシングは障害者も健常者も一緒に楽しめるスポーツだと感じた。パラスポーツを特別なものとして捉えるのではなく、誰もがスポーツを楽しんだり、スポーツを通して学べる社会の実現について考えるきっかけとなった。
  - ・また、京都駅近くの元山王小学校内に車いすフェンシングのナショナルトレーニングセンターがあり、京都で世界を目指す選手が練習を積んでいる、ということもご承知おきいただきたい。

## ■ 報告ー2 令和2年度教育予算の概要について

- [配布資料 令和2年度「教育予算の概要」について](#)
- 事務局から
  - ・大変厳しい財政状況のもとではあるが、市政の基本計画「はばたけ未来へ京プラン」にある京都市の未来像を実現するための事業に重点的に予算が配分されている。
  - ・教育予算は1075億円。小学校で新学習指導要領が全面实施となるので、教育環境、少人数教育、専科教育などの充実、また、教職員の働き方改革、伝統文化体験、ICT環境整備などを進めてまいる。
  - ・生涯学習に関する予算としては、令和2年22.1億円、平成31年21.8億円と昨年度並み。生涯学習部の新しい事業としては、昨年のICOM（国際博物館会議）の成功を引き継いだ、「ICOMレガシー継承事業」が計上されている。
  - ・京都の伝統的資源を生かし、著名なアーティストとのコラボ、博物館の多言語化などに取り組んでまいる。
  - ・今後、予定されている文化庁の全面移転も踏まえ、文化・芸術の振興をより一層盛り上げていくため、様々な事業を展開してまいりたい。
  - ・もう一点、「社会教育関係団体への補助金予算」である。社会教育法第13条において、「地方公共団体が社会教育関係団体に対し補助金を交付しようとする場合には、あらかじめ社会教育委員の意見を聴いて行わなければならない」とされている。
  - ・これは、補助金を交付することによって、団体に対して不当な支配や干渉が加えられることのないよう、社会教育委員が行政をチェックするためである。
  - ・交付の目的は、各社会教育活動の支援のためである。御確認いただきたい。

## ■ 報告－3 令和2年度学校教育の重点について

### ○ 配布資料 [令和2年度「学校教育の重点」について](#)

#### ○ 事務局から

- ・「学校教育の重点」は、京都市の学校教育の年度ごとの重点をまとめたもので、学校と保護者・地域で共有し、取り組んでいくこととしている。
- ・京都は、国に先駆けて、町衆が自分たちの手で日本で初めて地域制の学校を創設した伝統を礎に、「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」ことを基本理念としている。
- ・社会の大きな変革期の中で、「教育はSDGsの基礎」と言われ、教育の果たす役割に大きな期待が寄せられている。
- ・持続可能な社会の創り手を育むために、「つながり、つたえ、つくりだす」本市教育の歩みを確かなものにしてまいらる。
- ・学校運営の7つの柱を設定しているが、6番に「社会に開かれた教育課程」とある。新しい学習指導要領では「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を地域全体で共有し、共に子どもたちを育てていくこととしており、保護者・地域の皆さまと連携・協働した取組を進めることとしている。また、7番では、社会と連携した支援も展開してまいらる。
- ・「重視する視点」として、子どもの「主体性」と「社会性」を育成し、「自ら学ぶ力」と「自ら律する力」を高めることとしている。こうしたことが、生涯を通して学ぶことにもつながると考えている。

## ■ 主催事業 及び 刊行物の案内・説明

#### ○ 事務局から

- ・PTA1月号では、PTA フェスティバルについて、文部科学大臣表彰と日本PTA会長等表彰について報告している。日本PTA会長表彰（個人）を大澤委員が受賞されていることを紹介させていただく。
- ・大澤委員は御自身の学校のみならず、全市のPTAの代表としても御尽力いただいております。そういった御活動が評価されての表彰である。改めて感謝申し上げます。

#### ○ 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市PTA連絡協議会会長）

昨年は市P連の会長もさせていただきました。長らくPTAに関わらせていただき、7年ほどPTA会長をさせていただいております。その中で、皆様の御協力の下、様々な取組をすることができております。

写真では、ちょっとはじけた感じになっておりますけども、子どもも楽しんで、親も楽しむということが、活動していくうえで大切なことかと思っております。

今後子どもたちのため、いろんな活動に携わっていきたく思います。そして、大人が生き生きとすることが、子どもたちにも大切かと思っておりますので、大人の生涯学習につきましても、これから、皆様と一緒によりよい活動に繋げていきたく思っております。引き続き、よろしくお願いいたします。



#### ○ 事務局から

- ・ゴールデンエイジアアカデミーで京都市社会教育委員会議元議長の井上満郎先生が講演される予定となっている。京都アスニーの事業については、前述のニュースレターが掲

載されている「まなびすと」と合わせて御覧いただきたい。

- ・「GOGO 土曜塾」でジュニア京都観光大使が京セラ京都市美術館を取材した様子が掲載されているので、御紹介させていただく。

## ■ 議事-1 これから求められる生涯学習（次期基本計画案）について

### ○ 配布資料 [これから求められる生涯学習（次期基本計画案）について](#)

報告者（京都市教育委員会 生涯学習部 吉川 昌成 生涯学習推進課長）

- 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役，アテネオリンピックセーリング競技日本代表）  
（欠席委員からの意見紹介）

本日は参加させて頂けないので、解釈が少し違っていたら申し訳ございません。拝見させていただいた今回の資料も多くの方々の熟慮と素晴らしい内容で、自分自身でも得た経験や学びの背景にある形を知りました。

私は、自分以外のこと、もの、ひとと触れることがより多くの学びを得る機会だと思います。

素晴らしい今後の計画ですから、広告をふくめ、団体や施設など、知っていただく、また自然と得られるような「接点」のプラットフォーム作りが課題かと思われます。「接点」のプラットフォームは、継続のカギにもなると思います。

文化都市である京都の事例が、地域と行政、人、学校や企業を含む団体などのかかわり方が、学びのきっかけであり、それを通じて活躍の場にできれば、指定都市社会教育委員連絡協議会でより多くの皆様と共有できるかと思えます。

以上、参加できず誠に恐縮ですが、御報告させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

- 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

これから求められる生涯学習ということで、京都市の基本計画の審議会でも御意見を申し上げましたところですが、資料にもまとめられているように、生涯学習の対象は、シニア、社会人、そして子どもと幅広いので、均一に同じことをしていればよいものではありません。

京都ならではの伝統文化は他市にないものであります。歴史とかそういったものを体験できる。身近に感じるができるということとはとても大きいことです。

学校で言えば、生き方探究館の取組は学校にとっていいと思います。

小・中・高では学校を軸に地域と連携して学校を使ってやってもらえたらと思います。

また、人口減少の時代なので、学校の空き教室をシニアや社会人の方の生涯学習に活用して、地域で地域のことを学ぶということも大事なことはないかと思えます。

一方で、今般、新型コロナウイルスの影響で、企業もテレワークを活用することになってきています。そういう意味では、ウェブを活用した学習など、大きく変えていかないといけないかと思えます。これまでは一か所に集まっていたものを、ウェブで見られるようにするなど検討していかないといけないと思えます。

今日の会場アスニーは図書館と隣り合っていますけれども、図書館に来ないと本を読



めないのでははく、これもまた、ウェブを活用して、本が読めることができればよいのではないか。例えばひきこもりの方も含めて、「ものを知る」ということを、そこに行ってやることも大事なことがあるが、そうではなくて、そこにいなくても見られるように、いくつか選べるメニューを京都方式で極力予算をかけずにやっていただけたらと思います。

労働組合の立場で会社と話しをしていても感じるが、企業側も考え方が変わってきている。一つの会社に就職して最後まで、ということではなくなっている。経営側からすると同期入社で全員を昇格させる訳にはいかないのだから、どこかで序列がついて、50歳ぐらいで子会社に出向してくれるか？ということが、大企業の場合、これまで起こっていました。

労働組合の立場からすると、今はできないが、逆に40歳で定年退職するという選択肢も選べるようにして、それから新たな道を行けるようにする。そんな道ができれば、企業に勤めながら自らスキルを磨いていくことができますし、スキルを磨くための年休や有休のような制度を作って生涯学習をやっていく。社会人として働きながら学ぶということが必要だと思います。

一般的にリカレント教育と言い出してやったのは、働く女性が結婚、出産して退職する。子どもが小さいので時間的なことでパートで働く。そんな方が子育てが落ち着いたら、能力もあって優秀なのだから、仕事に戻って、働いてもらえたらよいのだが、なかなか難しい。戻るためにスキルアップしようと研修を受けるにしても費用の問題が生じる。そういった部分は行政が支援していただけたら。

今は実験段階で国から補助を受けてやっているような状況ですが、人生100年時代になって、今、会社は60歳で定年ですが、実は50で出ないといけなかったり、いろんなことが起こっている中で、労働者としても、しっかり知識を得る必要がある。

キーワードとしては、「いろいろな選択肢を選べる」ような仕組みにしていきたい。京都ならではの、地域を基軸として、お金をかけずにリカレントをやっていけたらと思います。

是非、リカレント教育でお願いしたいことがあります。知識の部分も、もちろん大事なのですが、先達の経験の部分も聞くことができるようにしていきたい。実体験、それまでやってきたことについての生の声を聞くことも大事にしていきたい。

#### ○ 櫻井 寿美 委員（市民公募委員）



全てが集まってすることではなくて、新しい通信の「5G」も現実になってきましたし、今回のコロナウィルスの影響で私の知っているフィットネスクラブでも、アプリを使って個別のレッスンを家で受けられるように実際になってきています。

また、話を伺いながら、自分自身の反省も含めてですが、例えば障害があって施設で生活をされている方の視点も、これからの生涯学習を考えるうえで入れておかないといけないと思います。

私には、障害があり40年ぐらい寝たきりで施設で暮らしている、御両親もお亡くなりになっている友人がいます。その友人を訪ねて施設に行った際、利用者の方々が大きな部屋に集まってきて、一つの大きなテレビ画面だけを見て過ごされているのを何度か見えています。友人と話をしていると、臨床美術といって腕が動かなくて

も絵を描いて表現したいとか、個別の活動をしながらしています。施設の設備や人員等のため、現在の環境ではやむを得ない部分があると思うので、そういったところに個別で選んで、自分一人でも学べたり体験することができればと感じました。

SDGsの観点からも、取りこぼされてしまいがちな方も一緒に学べるようにしていただきたいと思います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

新型コロナウイルスの影響の中、学びの多様性、様々な可能性が試されているのではないかと思います。

○ 本郷 真紹 副議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

今の御発言に関連して、10年後を見通した生涯学習を考えるにあたり、おそらく我々の想像を絶するぐらいに通信・伝達技術が発達するでしょう。当然5G やスマホが日常的なものになっている状態をどのように捉えていくかという視点は絶対に大事だと思います。

4月から新型コロナウイルスの影響で私の勤務大学も授業ができなくなりますが、それを遠隔でやるということになりました。臨時休校明けまでアプリを使って授業をせよと下命があり、対面型では絶対にやらないというスタイルになってきています。

ある意味では、そういうコンビニエントな部分が技術の発達によって構造化する、というのはありがたいことなんですが、ただ、懸念されるのは、フェイクあるいはバーチャルと実体との区別がつかなくなりますよ、ということです。やたら頭でっかちになって情報ばかりを収集することでこと足りるという風潮が出てくるのは一方で非常に望ましくない。

今次の学校教育で改革が言われている、体験型学習、課題探究型学習がなぜ必要かというのは、フェイクに惑わされない、自分の目で見て、自分で体感して何を思うか、というのを、もう少し見直せという方向です。ある意味では不自由を体験するということ。「足るを知る」ということがよく言われますが「足らざるを知れ」という実感型の学習が一方で必要になってくる。

そういう場というものは生涯学習を考えるにあたって常に頭の中に置いておかないとならないことではないかと思っております。

実は今日の午前中は東京の代々木のオリンピック記念青少年総合センターで会議がございました。

高校生を対象に体験学習のコンテストをやって文部科学大臣賞を含めてアワードを作るという国立青少年教育振興機構が主催するイベントの企画会議だったんですけども、段々とそういうかたちにシフトしていこうと思うんですね。

そうした場合に生涯学習は、高齢者の方々とか様々な世代の方々は何を提供するのかという視点は当然持っていないといけないのですけれども、基本的にはただ単純に個人個人の趣味的な満足度を増すというのではなく、やっぱり突き詰めてみたら次世代を育てる、次の世代に伝えていくという視点。そのために自分自身を涵養していただく、高齢者の方々には涵養しなおしていただくといった方がよいかもしれませんが、そういう



視点で取り組んでいただくことが非常に大事なかなと思います。

現場で子どもたちに接している立場の者から申しますと、非常に難しい問題もたくさんございまして、例えば、先ほどの提言にも出てきましたが、地方創生ということが言われていて、少子高齢化が進む中、どうかたちで地方を維持していくのか、ということが言われています。これは、実は、一方で必要とされているグローバル化と逆ベクトルになってしまう。つまり、世界を知れ、世界に出ていけと、国際的に云々となりますと、子どもたちの関心は全部そっちにいてしまいますから、地元というものへの意識が薄れてしまう。それじゃ困るということで、今度は逆に地元のことをよくやってくれとなると、ただでさえ少子化ですから、結局、親は子どもを離しませんので世界に出ていこうとしない、冒険しようとするということになってきて、非常に難しい問題があります。

その辺りを、上の世代にいる人間が自分自身の体験を通じて何を次の世代に伝えていくのかということを考える。生涯学習にはそういう重要な意味があると思う次第です。

- 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）  
非常に大事な視点をいくつも御指摘いただいたと思います。

- 田村 穂絵 委員（市民公募委員）



会議が3回目になっても、まだドキドキが止まりません。今、週に一度、中学校にボランティアに行っています。中学生に「週末、何してたんですか？」と尋ねたら「Netflix」と。「Netflixも楽しいけど、どこか京都の良い所とか行かないの？」と聞いたりするんですが、家で映画やアニメを見たり、と。どうしても保護者の方も忙しいので、子どもでできる範囲になってしまって、文化財の活用という意味でももったいないなと思っています。

育成学級に入らせていただくことが多く、育成学級は少人数なのでフィールドワークに行きやすい環境があるんですけども、せっかく文化財に行ったとしても、担任の先生が社会科以外の教科の先生だったりすると文化財の良さを100%味わえないこともあります。忙しい先生が、その日にある行事の情報にアクセスできないというのがあるのではないかと思います。先ほど、インターネットの活用、特にアプリの活用についてお話がありましたが、例えば京都の文化活動ということで選んでいったら、華道だったり茶道だったりというのが、月ごとに確認できるという整理された情報ツールが活用できたら、学校現場の先生や、保護者の方の土日の予定の立て方に役立つのではないかと思います。

- 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

できるだけ、どの世代の方も使いやすい情報資源の提供というのは、行政の中でも考えていただきたいと思います。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）

地域女性会の活動をしておりますが、アナログ的な内容ですとときております。現状、人生の後半に差しかかったメンバーで構成されており、なかなか若い人が入らないという悩みがあります。そこで地域女性会のどこがよいかと言われると、いろいろ勉強することができるということも挙げられる人も多いです。教育委員会主催のものも含めて、いろいろな講演をお聞きして刺激をもらっていますが、どうしても受け身になりがちです。私たちは「地域」女性会ですので、学んだことを何らかの形で地域に還元していく役割があると考えています。



「市民スクール21」という事業があって、1年間計画を立てていろいろなことをします。文化財を見に行ったりもするんですが、私の学区では、この3年間は地域を巻き込んだ形で防災について学んでいます。

エコクッキングとか実践を伴うこともするんですが、やはり専門的な知識も必要なので、行政の方に講師をお願いしたら、とても快く引き受けていただいて講演をしていただきました。そんな時も多くの地域の人を巻き込みたいので、回覧板で周知しています。

資料のアンケート結果を見ると、82.3%の人が「学習したい」と回答していて、「この1年間に学習をしたことがない」と回答した人が41.3%います。18歳以上が対象となっていますので、高齢者だけに当てはめたらどうなるかわかりませんが、小さい地域の中でもどんどん情報提供していく、それが起点になるかと思えます。そうすれば、次は例えばアスニーでどんなことをしているか興味が広がっていきます。「まなびすと」を町会長会議の時に置いておくと、持っていかれる方もいます。ただ、外になかなか出ていけない方のためには、地域女性会として私たちが、企画して巻き込んでやっていけないといけないかと思えます。そのためにも私たちは情報をたくさん取り込んで、また、発信していかないといけないので、「まなびすと」は役に立っています。「これから」ではなくて「現状」のお話になってしまいました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

アナログでも非常に活発に活動しておられると思います。今後はITも活用してやっていけたらとよいですね。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）

そうですね。若い方を巻き込んでやっていきたいと思えます。

○ 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市PTA連絡協議会会長）

廣岡委員から生涯学習の場として、学校を活用するということがありました。生涯学習は日々、小さいことからやっていくことが大切ですので、身近にある施設を活用することができればよいと思えます。そういう意味では、地域に開かれた学校の運用の仕方をしっかり協議したうえで、活用できればよいと思えます。

キーワードの一つに「社会に開かれた教育課程」があり、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められている資質・能力を子どもたちに育む、とあります。この部分を担うのは学



校運営協議会ではないでしょうか。ただ、学校運営協議会の役員には高齢の方も多いので、現在、社会で活躍されている方にも入ってもらえたらよいのではないかと思います。これは年齢の高い方を否定する意味ではありません。年齢を重ねた方には、積み重ねてこられた経験がありますので、それと、今、社会で働いている方の実体験を融合させながら、子どもたちに何が必要なのかを考えていけたらと思います。

アンケート調査で「この1年間に学習をしたことがない」の主な理由は「仕事が忙しくて時間がない」と「特に必要がない」の二つが大半を占めます。

我々世代は「仕事が忙しくて時間がない」というのが正直なところですが、そう言い訳せずに、子どもたちに何が必要なのかを考える場というものは自分で見つけていかないといけません。また、「特に必要がない」と答えておられる方はおそらく、仕事をして収入を得ている方で、そのことがイコール社会人の一員であると思っているのではないのでしょうか。経済活動をしてお金を得ることだけではなく、そこで得たものを社会に還元することが社会人だと思いますので、そういった意識を持たないといけません。ただ、意識を持ちましょうと言って、すぐに持てるわけではありませんので、これから社会に出ていく若い方にも、自分が社会で得たものを下の世代に次第送りをすることの大切さを伝え、社会に出て様々な経験をして、それを子どもたちに返していく意識を持っていただけたらと思います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

学校という施設を活かしながら生涯学習を進めていけたらということでした。

先ほど、豊田委員が行政の方に講師を依頼したということでしたが、それは施設でなく、人材の部分ですが、そういう視点は私自身にはあまりありませんでした。行政の方の専門的な視点・知見を活かすのは良いアイデアだと感じました。地域等からそういった提案があった場合、是非やってみようという方はおられませんか。稲葉統括、いかがでしょう。

○ 稲葉 弘和 統括首席社会教育主事（京都市教育委員会 生涯学習部）

私は学校籍でございますので、「教える」ということをこれまでしてまいりました。「教える」ことを通して「学んだ」ことを、現在も、PTAとかいろいろな場でお話させていただいております。

○ 春田 寛 生涯学習部長（京都市教育委員会）

「京都市政出前トーク」というものがありまして、市民の方から申し込んでいただいたら、京都市のそれぞれの部局から、教育に関することなら教育委員会から担当職員がお伺いして、30分～60分ほどわかりやすく説明をさせていただいてから、質疑応答に移るということをしています。10年以上続けていますが、発信がまだ足りないのかもしれないので、その辺りもしっかり取り組んでいけたらと思います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

防災のこととか、今回のコロナウィルスに関しても、落ち着いてからになると思いますが、行政がどのように対応して、どのような課題があって、ということをおよそこの視点で、まとめておくと、次に似たようなことが起こった時の参考になりますよね。

一人一人もちろん情報を集めますけども、どうしても情報も偏ってしまいますし、行政が俯瞰的な視点から市民に発信してもらおうと市民にも参考になるのではないかと思います。

テレビやネットから専門家の情報は流れてきますが、行政の方々の御苦労というのは、それとはまた全然違うところもありますし、それは、市民にとっても役に立つと思います。

今回のことだけではなく、昨年、一昨年の災害に関しても京都市はこうだった、また、他都市はこうだったというのを教えていただくと非常に良いのではないかと思います。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

京都市は非常に恵まれたまちだと思っています。大学、神社、仏閣や美術館等々が至る所にあり、30分もあれば市内を巡ることができます。大学では学生だけでなく、社会人も公開講座や通信で学ぶことができます。各大学、盛んにそういった活動をしておられます。また、こちらのアスニーもそうですが、いわゆるカルチャーセンターも放送局や新聞社等が各方面で講座を開いていますので、毎日、どこかで、何かを学ぶことができます。神社、仏閣等であれば、拝観料等があったとしても、比較的小金をかけずに歴史や文化を学ぶことができる恵まれたまちだと住みながら感じています。



とは言っても、自分が行くかと言われる、なかなか時間がなかつたりするのですが、好奇心と行動力。情報をキャッチする、それが行動力なのかと思いますが、自分で探しに行く、新聞にも載っているし、足りなかったらネットで調べられるし、自主的に学びに行く場所には、本当に京都市内は恵まれていると思います。

それで社会に貢献していくということで、私事ですが、今回、「京の冬の旅」のポスターに出演させていただいたのをきっかけに、「京の冬の旅巡り」をしてみたんですね。それこそいろんな神社・仏閣に伺ったんですが、各お部屋にある、屏風や襖絵にそれぞれ一人のボランティアの方がついて、説明してくださるんですね。そういうボランティアの団体があって、公開期間中は自分たちがあちこちで説明しているんですよ、とのことでした。とても知識も豊富で上手に説明していただきました。たくさん勉強会もしておられるんだろうと思います。そういう団体があることを初めて知りました。

その方たちに関してもそうですが、こういったかたちでの社会貢献をしていくには、仕事をしているとか子育てをしている世代はちょっと難しいので、結局、お仕事を引退された人とか、時間と経済力、気力のある方しか、こういう社会貢献の活動には結びつかないのかなと思います。

カルチャーのこともそうなんですけども、私自身、講座を持たせてもらう中で、これだけ講座があると価格競争みたいなのところがあって、受講料が非常に安い。フォーラムもそうですが、無料講座もあって、それは素晴らしい。自分自身が受けに行くなら、それは無料の方がよいし、たくさんそういう勉強会があって受ける側としてはありがたいのですが、教える側としては、それではなあ、という非常に難しいところがあります。大学の先生もたくさん、そういうところで教えておられたりすると思うのですけれども、受ける側は安い、無料の方がありがたい。伝える側としては、どこからお金が戻ってくるのかなと、

なかなか難しいところがあります。

前回の会議でも出ていましたが、大学生が京都に留まるのは、2割ぐらいしかいない。これだけ京都で大学生が学んでいるのに、出て行ってしまうのはもったいない。私のクラスでも優秀な学生たちが東京に行ってしまう。地元に戻るのには良いと思うんですね。

もちろん、東京が悪いと言っている訳ではありませんが、そういう仕事が京都、せめて関西にないのかと、いつも思います。就職活動をするにあたって、大企業から見ていくと、だいたい首都圏になってしまうのかなと。それではもったいないので、貢献してくれる学生さんがまちに残ってくれるというのは、土台になる仕事のことがあるので、京都には伝統工芸を守る中小企業がたくさんあるのですが、そのことを知らないから大企業にしか目が向かないということもあると思うので、情報発信して知ってもらって、学生が留まってくれるとうれしいなと思います。

先ほどのお話にも出てきましたが、ウェブを使った技術の発展が学びにつながることは素晴らしいことで、ツールとして使うのは良いと思いますが、人が人である限りは、対面で人と接したときのコミュニケーション能力が必要だと思っています。例えば、学生たちも文字にするのは上手です。まとめるのも上手ですけども、「じゃあ、しゃべってごらん。ディスカッションしてみて。」とテーマを与えるとディスカッションするんですが、教室に入ってきた際に「おはよう。」と挨拶するかと思えば、それはしない。時間があればスマホに向かっている。それはもったいないと思うんですね。人として生きていく限りは、人と接するとき言葉をかけるとか、会話をするということが、大切なのではないかと。カルチャーなりフォーラムなりに参加される方も、個々に学んで帰る、それだけで終わってしまっていることも多いのではないのでしょうか。

そこで、対話型というのですか、今、小・中・高校でアクティブラーニングの活用とか、自主的に学びにいくとか、それを発信するとか、授業で活発になっていると思いますが、大学に行くと、途端に講義型が多くなってしまふ。私の講義ではなるべくディスカッションを30分ぐらいはできるようにしているんですけども、それがそのまま大人になってしまうので、結局、個々に学ぶところはたくさんあると思うんですけども、それを交流できないままで終わってしまうのは、どこかで孤立した人になってしまうというのがもったいないというか、寂しいと思います。

そもそも論になってしまうかもしれませんが、通信機器は使いながらも、人としての継承する能力を養うという部分では、今後、講義型で学ぶだけでなく、そこで「お隣の方と話してみましょー」、「何かやってみましょー」、というようなことで、常に一人ではないという意識を持つことが、これからの時代、求められるのかなと思います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

高齢化社会の一つの問題が孤立化しているところがあると思うんですね。家族の数がだんだん減って行って、最後、一人で暮らしていくってなったときに、どれぐらい多様な機器を上手に使いながら、孤立化というところから、自分を、自分の心を、自分の存在を守っていけるかというのが、これから生きていくうえで、誰にとってもある種の生きる技術、生きる術になると思うんですね。

今の若い人は、スマホとかIT機器がないと心穏やかでいられないぐらい、ほとんど依存と言ってもよいような状態で学んでいるようなところだと思います。ですから、学校教

育の中も、むしろ学びの手法というのをできるだけ多様にしておく。もう、若いうちからできるだけ様々な学びのルートを経験してもらっておく、というのが、とても大事ですし、それがおそらく生涯100年を生きていく人間の暮らしにとっても本当に大事になってくると思います。それを学校教育だけではなくて、こういう京都市のような非常に恵まれたところで全国に向けたモデルケースのような生涯学習が展開できればよいなと思いました。

○ 園部 晋吾 委員（NPO法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人）



みなさんのお話を聞いていて、本当にそうだなと思いますが、私は学ぶということは、ただ単に知識を得るとか、面白いとかだけでは駄目だと思っているんです。例えば、その見聞きしたこと、体験したことっていうものを次に何かに使ってこそ、初めて学びが成立したというふうに思っているんです。だから、例えばアスニーの講演を聞きに来られたっていう方もたくさんいらっしゃいます。それが今日は面白かったとか、つまらなかつただけで終わってしまったのは、それは学びにならないと私は思うんです。それ

だけなら、映画やテレビを見たりするのと同じでして、そこで得た知識っていうものを次に何かしら自分が使ってみたり、次に何かを試してみたりしたときに、初めて学んだと言えるのではないかと思います。

また、学ぶことが好きだ、例えば、ずっと本を読んでいるのが好きだという方も中にはいらっしゃるんですが、大半の人には学びに対して、何かしらの動機付けが必要かと思えます。

例えば、学校だとわかりやすいです。試験、成績があるので、学ばなければいけない状況に追い込まれて学ぶことになります。それが社会人になってしまうと、その動機付けが特段なくなってしまって、自分のやっていることのプラスアルファになってしまうので、時間がなくなったとか、余裕がなくなったとかいうことで、学びからどんどんと遠ざかってしまうことになります。一つは動機付けをするということが、学びを深め、広げていくうえでは一番大きなことなのかなと思います。

では、社会人にとっての動機付けは何なのかというと、学んだことを生かせる場を作ることが一番、大事なことなのかなと思います。これは学生も社会人もお年寄りも、みんなそうなんですけども、人に何か伝えないといけない、教えないといけないということが起こった時に、人は一生懸命学ぼうとするんです。私なんか食育とかで子どもたちの前で話さないといけない、というところに追い込まれるとですね、やっぱり一生懸命、学ぼうとします。知識もつけようと思ったり、それを次に伝えていくようにします。子どもたちに質問されて答えられないと恥ずかしいという思いがありますので、そのために学ばないといけないなということがあります。

そういうことが日常的にコミュニティの中でできていけば、すごくよいのではないかな。例えば、高学年が低学年に教えるとか、大学生が小学生を教えるのもよいですし、社会人が学生さんに教えるなど、そういう場を作っていくことによって、学ばないといけないという動機付けができると思います。ですので、そういったことを積み重ねていくことによって、学びというものが自然と体の中に入ってくるのかなという気がいたします。

先ほどありましたように、今後、ウェブとかそういったものはどんどん発達していくのだと思います。ただ、私も同じ考えでして、あくまでも、伝達手段としてはすごくよいと思います。ただし、人と人が対面をしている、例えば、空気感というものが大事なのではないかと考えています。テレビ会議などは全国どこにいてもテレビ画面を通じて会議に参加できるので、すごく効率はよいと思います。でも、この場に集まっている、この空気感というものが、すごく大事なのかなという気がします。こういう空気感の中で出てくる話というのは、一方的な伝達だけでなく、そこに含まれている雑談であったりとか、ちょっと本論とは違った話であったりとか、そういったものが、実は学びにとってはポイントになると思いますし、大事なことなのかなと思います。ですので、今後、どんどんテクノロジーは発達していくと思いますけれども、そんな中でも、人と人とが顔を合わせることは、すごく大事、そして、そこで伝えていくことというのは、テレビ画面を見て伝えていくこととはやっぱり違うものが伝わっていくと私は思います。

そういう中での空気感ですね。面白いもので、クラスが何クラスもあったら、それぞれ全然、雰囲気違います。しゃべっていて反応も全然違いますので、その反応によって私がしゃべる内容もちょっとずつ変わっていくんですね。ですので、すごく深い内容まで話げできたクラスもあれば、浅い内容で終わってしまうクラスもあります。そういった空気感というものが、学ぶこと、人と人の関係の中では、大きく左右するのではないかと思います。

○ 本郷 真紹 副議長（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

今、園部委員がおっしゃったことは全く、そのとおりで、私は100%同意します。今、一番懸念されているのはですね、ちょっと本筋からそれますが、新型コロナウイルスの状況を見て、文部科学省がわざわざ通達を出して、遠隔授業のノウハウを学べとか、だんだんウェイトを上げていくことを示唆するようなこと言っています。本当にそれでよいのかなと思います。今は非常事態ですので、仕方がないですが、そうすると極端に言えば学校・キャンパスはいらないな、ということになってしまいます。本当にそれでよいのですか？という話で、だけど、だんだんと学生はその方が便利なので、そちらに慣れていきます。これはどこかで、この風潮に釘を刺しておかないと、とんでもないことになるのではないかとということが一つあります。

そして、もう一つは、生涯学習の場合は、学校教育と違って、学習指導要領がある訳ではないんですね。つまり答えを与えるのではない。だから、何を与えるのかというと、材料を与える。自分で考えて、自分でそれをどうアレンジして、自分でそれを人にどう伝えるかという、材料・素材を与えるというのが、本来の生涯学習の在り方であって、だからその考えるきっかけが、どういう動機付けで、皆さん方がそこに関心を持って、ある程度意欲を持って取り組んでいただくかということ、我々は考えないといけないのではないかなと思うんですね。

学習という言葉が否定してしまうと、生涯学習が無くなってしまうと困るんですけど、学習という言葉の持つイメージにはどうしても与えられた学び、極端な言い方をすると押し付けられた学び、やらなきゃいけない学び、というようなイメージを抱いている大人の方も結構おられて、どうしても二の足を踏んでしまうというか、「この年齢になって、また、勉強させられるのかいな。」と、そうではなくて、今後の生活を更に豊かにしてい

ただための素材を、材料を提供しているということを、伝えていく手立てはないかと思  
います。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

ありがとうございました。本当に大事なところだと思います。御意見を受けて、行政の  
方、何か、それについては、こう考えています。とか、この辺りはまだ、足りないところ  
ですとかありますでしょうか。

○ 在田 正秀 京都市教育長

本郷先生がおっしゃったように、文部科学省から通知が来ておりますけれども、GIGA  
スクール構想として、一人一台の端末を持たせるという環境を作って学習させていこう  
という流れはございます。ただ、学校としての役割を忘れてはいけません。おっしゃるとお  
り、人と人が一緒になって議論する、何かを作り上げるということが、学校で子どもがい  
るということの一番、大切なことであるので、それを忘れないように、我々も肝に銘じて  
頑張っていきたいと思っておりますし、そういう環境を作れば終わりではないと思っ  
ております。

もう一点、ボランティアを社会教育・生涯学習の中でどう位置付けるのが大切なこと  
だと思っております。2025年、団塊の世代の方が全て75歳以上になります。75歳  
以上でも働いておられる方もいらっしゃると思いますが、サラリーマンの多くは、ほぼリタイア  
して家庭と地域におられる中で、でも、まだまだお元気で、素晴らしい、知識と経験を持  
っておられる、そういう方々が、どうボランティアとして活躍いただくのかということ  
です。ボランティアしたいという方はたくさんおられますけれども、どうしたらよいのかと  
いう部分です。どこに行ったらよいかわからない。そういう仕組み作りなんかも、これ  
から必要なことですので、御意見・御提案があればおっしゃっていただけたらと思っ  
ております。

○ 廣岡 和晃 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

整理の意味で、ウェブは賛成なんですけれども、本郷先生がおっしゃったように、子ども・  
学生にとっての学びの場は、大学であったり学校の校舎であったり、学校を基点に学校で  
学べばよいと思います。それ以外のシニアの方や社会人、育児・子育てや介護をされてい  
る方には、材料を提供するという事なので、提供する選択肢の一つとして、ウェブがあ  
るということが大事だと思います。

子ども、小中高、大学もそうですが、地域の伝統工芸の方、企業の方、どんな企業の方  
でも構いませんが、その地域の方に学校へ来ていただけないかと、依頼して、その方  
に、通っている学校の近くにこんな会社があって、いつからやって、というような講義  
をすとか、遠くから講師を招くのではなく、地域に密着したかたちでやれば、子どもた  
ちもフェイストゥフェイスで地域のことが学べるし、地域の方も学校を身近に感じても  
らえると思います。

○ 向井 宏明 担当部長（京都市教育委員会 生涯学習部）

先ほど、事業の継続性のお話があったかと思いますが、アスニーではアスニーコンサー

トという事業を実施しております。料金は840円と安い金額でやっておりますが、これは企業から協賛金をいただいて実施しております。演奏者の方に出演いただいている以上、謝礼をお支払いしないとイケません。そのことと、演奏の質をどのように維持していくかということがあります。安いからよい音楽ではない、とはいきません。安いけれどもよい音楽に触れていただくということを、どのように継続していくかを真剣に考えて実施しております。セミナーについても同じことですよね。よい中身でしたら、皆さん来ていただけますけれども、内容によっては、あまり来ていただけないということも実際あります。安い料金で公共性を持たせながら、質もよい事業をどれだけ継続してやっていくか、ということも大事だと思います。

○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）



いろいろな方のいろんな御意見をお聞きして、こういう多様な意見を聞くことのできる、こういう場こそ生涯学習にふさわしいのかなと思いました。非常に勉強になりました。ありがとうございました。

確かに生涯学習という言い方は捉えどころのないところがあって、京都市の行政施策として、生涯学習をどう位置付けていくのか、なかなか難しいのかなと思いつつながら、皆さんのお話をお聞きしていました。

生涯学習と言わなくても既にいろんな趣味の会がありますよね。俳句ですとか、絵画ですとか、あるいは武道ですとか。そういう活動が生涯学習という言葉の外側で多彩に展開されていますし、京都市とかが講座を開いて勉強する機会があったりします。そして今日のテーマにもありますけど、リカレントということで会社を途中で抜けて、大学とかで勉強するという方もいらして、生涯学習、学習とはいったい何なのか、幅が広いとしぼりきれないと思うのですが、今日の話の中では、フェイストゥフェイスでやっていくことの重要性が出ました。私もそうだと思います。

いろんな活動を続けていくうえで、自分がこれを勉強したいからやるんだということの他に、志を同じくする人との交流やおつきあいですとかに楽しみを見出していく、ということもかなりあるんじゃないかと思えます。そういう視点を生涯学習にどう盛り込んでいくのが大事なことはないかと思えます。

それから学んだことを生かせる場が必要だというお話もございました。確かに大事だと思うのですが、私は成果を学習の結果として求めてよいのかな？と思えます。自分が学びたいから学ぶということをまず前提にするべきではないでしょうか。

在田教育長から団塊の世代がリタイアする2025年問題について触れられました。確かにその方々に対してどう学びの場を提供していくのかは大事なことなんだろうと思いますが、あまりそのような方への対策みたいな話になってくると生涯学習の意味というのは薄れてくるのではないかと思えました。

今日のキーワードの中に「人生100年時代」というのが出ていました。イギリスの学者でリンダ・グラットンさんという方が、「LIFE SHIFT」という本をお書きになって、これの日本語版が4、5年前に出て、私も読みました。大変面白かったです。

今までの人生80年という前提ですと、最初の20年が学びの場で、次の40年が働く

期間で、最後の20年がリタイアという3つのステージで人生は成り立っていたけれども、これからは100歳まで生きる人が増えてくるので、最後の余生ですね、リタイアした後の過ごし方が非常に重要になってくるという、大雑把な言い方をすれば、そんな話だったと思います。3つのステージからマルチステージに変わっていく中で人生設計をどうするか？その時に重要になってくるのがリカレント教育だという内容だったと思います。

実はリカレントで難しい点があると私は思っていて、会社を辞めて大学で学ぶとなった時、どうやって生活を支えるのですか？という疑問が出てきます。その辺りは、このリンダ・グラットンさんの本には全く出てこなかったです。ここがリカレントをやっている中で一番鍵になるところだと思うんです。先ほど、廣岡委員から会社も変わらないといけないというお話がありました。なかなか難しいのですが、私もまったくその通りだと思います。そのように社会が変わっていかないと、現在の状況のままだとリカレントを進めるのは難しいのではないかと思います。そういうことを考えると、生涯学習というのは社会改革の入口に位置付けられるのではないかなということをおもいました。まとまらない話ですが、本日、皆さんのお話を聞いての感想です。

ただ、ひたすら新しい情報が得られて楽しいなというのもあり、それから知っていることを伝えて、みんなでそれを味わうというの、もう一つの学ぶ楽しみだと思うんですね。若い人たちに伝えるのも楽しいですし、同好の士の間で共有するというのも楽しい。つまり知識を入れるだけではなく、それを広く発信していくところも含めて生涯学習、学習というと本郷先生のおっしゃるようにならざるを得ないということになってしまっているんですけども、学んだことを生かしながら次の世代も含めて豊かな時間にしていくという豊かな人生にしていくというのが生涯学習の一番よいところではないかと思っています。いろいろな意見が出て勉強になりました。ありがとうございました。

○ 下山 純一 学校地域協働推進課長（京都市教育委員会 生涯学習部）

様々な御意見をお聞きし、そういう視点もあるんだと参考になりました。大澤委員からもありました学校運営協議会を私は担当しております。学校運営協議会は地域の方々の力をお借りしまして、子どもたちのために、教育をよりよくしていくというものであります。本日の御意見を子どもたちのために生かしていけたらと思った次第でございます。

○ 齊藤 徹 施設運営課長（京都市教育委員会 生涯学習部）

アスニーと図書館の担当をしております斎藤と申します。先ほど、出前トークの話題が挙がりましたが、私自身はここ3年ぐらいで1回程度ではありますが、この春に北区の方に出向きました。その際は「こんなこともやっているのか」というような感想もたくさん聞くことができました。そういった意味でもっと広がりを持たせるためには発信がまだまだ足りないのかと感じました。

社会人の方、学生の方、お忙しいので、アスニー・図書館の利用者層に限られてきているという部分があります。幅広い世代の方に広げていくために工夫をし、考えておるところでございます。本日の御意見も参考になりました。ありがとうございました。



○ 山本 英生 参与（京都市教育委員会 生涯学習部）

本日は貴重な意見を聞かせていただき、勉強になりました。

その中で次期基本計画案にございます「みんなで目指す2025年の姿」の中に4項目ほどございまして、4つ目に「『子どもを共に育む京都市民憲章』の理念に基づく行動が市民に浸透している」という項目があります。

その実現に向けて取り組む「京都はぐくみネットワーク」の幹事長を大澤委員がしてくださっています。「京都はぐくみネットワーク」は100を超える様々な団体が参画し、行政区ごとに実行委員会を組織していただき、子どもために何ができるのか、ということで様々な取組をしていただいています。

そういう次世代を育てていく視点も生涯学習では大事なということと、さらには子どもだけでなく、保護者の方にも積極的に関わっていただいています。例えば子どもたちはIT機器の使い方を学んでいますが、上手に使っていくことも含めて、子どもたちに使わせる保護者の方にも、情報モラルについて学んでいただいています。

次世代をいかに育てていくかについて、ウェブの活用からフェイストゥフェイスで人との関係を構築していくことまで実りある生涯学習に繋げていけたらと思っております。

○ 戸田 晃司 担当課長（京都市教育委員会 生涯学習部）

子どもたちの健やかな成長のためにPTAをはじめとする関係団体の方々とお仕事をさせていただく中で、仕事でもあるんですが、自分自身のコミュニケーションの力を磨くことに繋がるなど、自らの学びになっていると思います。そういった様々な人との関わりから、いろいろなことを吸収して、常に生涯学習を心がけていけたらと思っております。

○ 吉川 昌成 生涯学習推進課長（京都市教育委員会 生涯学習部）

補足ですが、身近な学びの場として、学校の余裕教室を改修し、生涯学習に活用できる「学校ふれあいサロン事業」、そして小学校区を超えて利用できる「学校コミュニティプラザ事業」も行っております。より一層情報発信をしていかねばと思います。

■ 議事-2 指定都市社会教育委員連絡協議会について

○ [配布資料 令和2年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」について](#)

○ 事務局から

- ・7月3日に北九州市で指定都市社会教育委員連絡協議会が行われる予定。
- ・これは全国の指定都市が集まって、意見交換・情報交換を行うもの。
- ・指定都市の取組の状況を説明したり、意見を求められたりするもので、是非、吉川議長に御出席いただきたいと考えている。
- ・また、事務局からも職員が同行させていただく予定。

○ 吉川 左紀子 議長（京都大学こころの未来研究センター特定教授）

出席させていただきます。

■ 閉会（吉川議長）

■ 閉会挨拶（春田生涯学習部長）